

高岡の龍



仲之池 和童 著

この作品はフィクションです

チャムの少年時代

「おじさん、大変だよ。チャムが喧嘩をしているよ」息せき切って教えに来てくれたのは、長屋の3軒隣の太吉であった。太吉はチャムと同じ10歳の少年で、チャムの無二の親友であった。「どこで喧嘩をしているね?」「城下町のほうで、相手はお侍の子供、3人組だよ」チャムの父、アメ屋のタモは、その昔、津山多門と名乗る上杉家の下級武士であったが、訳あって浪人となり、今はアメ屋をしている。チャムは本当の名前はオサムだったが、皆はチャム、チャムと呼んでいた。

城下町に駆けつけると泥だらけのチャムが突っ立っていた。「相手の子達はどこへ行った?」チャムは父の問いかけに、まだ上気したままで、目をむいて城下の方を睨みながら答えた。「城下の方に逃げて行った。3人組なのにだらしがらない」父は困った顔で思わずつぶやいた。「うーん、やってくれたな」

それから数刻。思った通りに、町奉行所からタモとチャムに出頭を命ずる呼び出しがあった。

タモがチャムを連れて奉行所に出頭してみると、「タモ、その方の息子、チャムが侍の子供に乱暴をしたとの訴えが来ているぞ」と、奉行から詰問があった。タモが平身低頭して「まことに申し訳ございません」と答えたが、チャムが口をはさんだ。「私は何も悪いことはしていません。お侍の子が3人も一緒になって悪さをしてきたので、追っ払っただけです」「チャム、黙るがよい」「お奉行様、この度はうちのオサムが、お侍様のご子息に乱暴をはたらき、まことに申し訳ございません。きびしく折檻をして二度とこのようなことの無いようきびしくしつけますので、この度は寛容な取り計らいをお願い申し上げます」「タモ、きびしい折檻とは何をするのか?」「2日間、飯抜きを与えます」「よし、二度とこんな騒ぎを起こさないように、よく指導するようにいたせ」「まことに、ご迷惑をおかけしました」

奉行所からの帰り道、チャムはまだ不満であった。しかし、父に迷惑をかけたことについては、深く反省し、二度とこのようなことをしないことを誓った。

それから、5年。チャムは15歳になった。相変わらずよく喧嘩もするし、我流ではあるが相撲や剣術も、武士の子供以上の能力を持つ子供に育った。

そして、またやってしまった。「おじさん、本当に大変だよ。チャムが喧嘩をしているよ」息せき切って教えに来てくれたのは太吉であった。また武士の子供と争いを起こし、しかもそのうちの一人を殺してしまった。今度は父も奉行所に申し開きできない状態になってしまった。「チャム。お侍の子息を殺傷しては、もう、私も、お前も死んでお詫びをするばかりだ」「侍の子が3人組で私に刀で切りつけてきたので、私は棒で相手をしただけです。悪いのは向こうです」「チャム、そんな話が通じないのは、お前も、もう15歳になったのだからよく分かっているはずだ」奉行の裁きは「タモを打ち首とする。チャムは、命だけは許すが、高岡から追放す

る」と下だされた。「お奉行様、よく分かりました。オサムの命をお救い下さり、ありがとうございました」「チャム、お奉行様のお裁きをありがたく受けなさい。私は、お裁きのとおり、ここで一死を持って償おう。お前はもう高岡には居れないが、尾張の方では、織田信長という武将が、自由な町を開いているそうだ。そこで何とか生き抜いてみろ」「お父さん、この度は、私の不祥事でお父さんが打ち首になるような大迷惑をおかけして、死んでお詫びをしなければなりません。一命を許された今、私は高岡を離れて何とか機会を求め、一人前の人間になります。今まで育てていただき、ありがとうございました」

チャムは、そばにいた母にも謝った。「お母さん、このたびは私の不始末でお父さんが命を落とされることになり、なんともお詫びのしようもありません。私は、この国を離れて生きてまいりますが、お母さんもお無事でお暮らしてください」

うめが優しく言葉をかけた。「チャムよ。私は、何とか生きてゆくので心配するでない。私は、お前の行く末をお守りくださるよう、毎日、あの立山さまにお願いするので、お前も正しい心をもって生きて行きなさい」

「もう一つ。これはお父さんが内密にしていたのですが、実はお父さんは高貴の血を受け継いでおられたのです」「お母さん、高貴というのはどういうことなんですか？」「お父様が打ち首になった今では、大きな声では言えないけれど、お父さまは天皇様の血を引いておられるのです。若い頃、高貴な人たちの間での仲違いがもとで、都を追い出され、この地に来られたのです。高貴の印は私が預かっています。お前も高貴の血を受け継いでいるので、お前にこの印を渡すのが本当だけど、お前はこれから国を出て、生きていかなければなりません。お前が立派になった時、この印を渡しましょう」「お母さん、申し訳ありませんでした。そんなことを知らないままで、大変なことをしてしまいました。私は歯を食いしばって、きっと立派になって、お母さんを迎えにまいります」

諸国放浪

チャムは高岡を離れる時、母が毎日拝んでいた、そして、チャムも少年の頃から毎日仰ぎ見ていた立山に登った。八月の高岡は暑い毎日だったが、険しい道を登って立山の頂上に立つと、高岡の町の向こうに青い大きな日本海が広がっていた。そして、山頂の冷気に包まれた立山の不思議な力が、チャムにこれから歩むべき道を教えてくれたような感じを得た。「きっと成功して故郷の高岡に戻って、父に、母に恩返しをするぞ」と誓って、立山を後にした。

チャムは立山から険しい山道をかき分け、上り下りを繰り返しながら信州大町に出た。大町ではにぎやかに夏祭りが行われていた。腹が減っていたが、村人が祭りのおすそ分けの食べ物を与えてくれた。

「さて、これからどこへ行こうか」 思いを巡らしていると、父から聞かされた川中島の戦いの地を思い出した。父は時折、チャムに「私は川中島の合戦では上杉軍の武士として、武田軍との戦いに武勲をあげたが、戦いの後、小さな口論から仲間の侍を傷つけてしまい藩を追放され、アメ屋の生活で余生を過ごしてきた」と、語っていた。チャムは、父からかすかに聞いたそんな話を思い出しながら、川中島への道を歩いていた。日が暮れてきたので、どこか泊めてもらう所を探していると、運よく百姓家があり、納屋に泊めてもらうことが出来た。

その晩はぐっすり眠って翌朝、チャムは親切なお百姓さんに「川中島では、何度も何度も上杉と武田の戦いがあった、私の父も昔、合戦に参加したと聞きましたが、どんなだったんですか？」と聞いてみた。お百姓さんは「何度も、何度も合戦はあったが、われらには関係ないよ。とぼちちりを受けて、命を取られたり、食べ物を取られたりしたいように、逃げただけだよ」と言った。川中島に着くと、そこは千曲川が作る小石の河原であり、何の変哲も無い所だった。

チャムは、父が侍を辞めた上杉の軍には行く気もなかったので、「それじゃあ、おじさんは武田の侍のことなど何にも知らないの？」と聞くと、百姓のおやじさんが「いいや、武田信玄という殿様は、上杉軍とも戦ったし、いい部下もいて、なかなか心の広い殿様らしいよ」と言った。

元気のよい武田の軍に、仕官の道があるかもしれないと思い、甲斐の武田の本拠に行ってみることにした。

川中島から甲府までは約40里あり、歩いて行くのががんばっても3日はかかるが、他にすることもないので、ぼちぼち歩いて行ってみることにした。

安曇野、茅野を経て、甲府に着いた。チャムは、「武田軍は上杉軍に勝って、甲府の町はもっと賑やかであっても良さそうなものなのだが、何かそうでもない。何かありそうだな。侍になっても、先は望めないかも知れないな」と直感した。チャムの直感は当たっていた。信玄は、

それから3年後、元龜3年、徳川家康との三方が原の戦いの最中に死ぬことになる。

チャムは甲府を後にして、浜松に向かった。浜松には、まだ若いが大器と評判の徳川家康がいる。浜松の町は家康が新たに城を築いて、岡崎から移ってきた町で活気があった。

城下の市では野菜や菓子、干し魚から古着、中古の鎧かぶと、刀、槍をはじめ目を見張るほど豊かな商品が売られていた。まず、飯を食べなければならない。チャムは中古の鎧を売っているおやじに商売の手伝いをさせてもらうよう頼み込んだ。勿論、中古の鎧は、山伏せりが、戦に負けた落ち武者から剥ぎ取ったものだ。鎧屋のおやじは名前を弥吉といったが、チャムの顔を見て、「ここで売ってみろ。もしうまく売れば、駄賃をあげよう」と情をかけてくれた。

チャムは父であるアメ屋のタモから学んだ商売のコツのようなものが自分の体の中に息づいているのを感じた。その日、上手に鎧を2揃い売ってしまった。弥吉は、「これは商売の才覚のある奴だ」と感心して家に連れて帰ってくれ、おいしい夕食も食べさせてくれたうえに、土間に藁を敷いて寝かせてくれた。翌朝、朝飯を食べると、弥吉は「さあ、行くぞ。今日も鎧を売ろうぜ。」と、市への出発を促した。チャムも「俺には商売が合っているな」と感じかけていた。何故か分からないが、今日もまた、中古の鎧が2揃い売れた。しかも、昨日よりいい値段で売れた。こんな日々が続くと、弥吉は大喜びで、「チャムよ、俺の子供になれ」と手放さなくなったが、チャムにはまだ追い求めている夢があった。

ある日、朝市の手伝いをしていると、「家康様じゃ、殿様じゃ」と声がきこえてきた。見ると、りりしい武士が家来を連れて通りを歩いてきた。このとき、家康は27歳、チャムは15歳であった。チャムが店番をしながらじっと家康を見ていると目があった。「おい、そちはいい目つきをしているが、ここの店の者か？」と声をかけられた。「いえ、この店の手伝いをしていますが、本当はお侍になりたいと思っています」「そうか、徳川もいずれ足輕を募集するつもりだ。そちに実力があれば侍に取り立てるので、それまで力を磨いておけ」チャムは、市場ではじめて見た殿から暖かい声をかけられ、運命的なつながりを感じた。チャムは市場の手伝いのあいた時間を剣術の稽古に励み、「徳川様のお侍になるんだ」と、夢が広がった。

しかし、侍の募集は一向に行われなかった。そんなとき、旅芸人の一座が市にやってきた。日の出座という旗を立てて芝居小屋の準備をしていたので、見ていると鎧売りよりも面白そうだったので、「何か手伝いすることありませんか？」と、親父さんに声をかけた。親父さんは、この芝居一座の座長で名前を奎助といった。「ちょうど、手が足りないところだった。ちょっと、小屋作りを手伝ってみな」「お願いします」ということで、鎧売りの親父さんに断って、芝居小屋の手伝いの仕事にありついた。奎助は新入りのチャムをみんなに紹介し、手際よく小屋の

準備を終えた。

小屋の準備が終わった頃には、すでに夕方になっていた。裏の掘っ立て小屋に戻った後、左助は明日の芝居の指図をした。その後、粗末ではあるが暖かい夕食にありついた。夕食の世話を左助の妻フキと、娘チヌとその妹ききょうがしてくれたが、左助と、この母娘は明日の芝居の花形役者でもあった。

翌朝、芝居小屋を開いたが、裏方の仕事は呼び込み、お囃子、大道具小道具の出し入れと、次から次へと押し寄せてきて、目が回るほどの忙しさだった。そして、一日が終わり、夕食にありついた。裏方としての忙しい日々を過ごすうちに、座長が「チャム、明日はお前も芝居をやってみるか」と声をかけてくれた。「お願いします。やらせてください」と頼み込み、芝居に出してもらえることになった。もらった役は、すぐに殺される役であったが、チャムは懸命に努めた。するとお客から、やんやの喝采があり、中にはおひねりまでくれる始末であった。忙しい一日が終わり、左助は「お前は見所がある。普通は、死ぬ役にはだれも目などかけないのに、お前にはお客がつく。いや、いい稼ぎだった。明日は、もっと目立つ役をやらせてやろう」と、ご機嫌であった。

翌日、芝居小屋にはお客が列をなしていた。若くて器量のよいチャムが、いい役どころをやったので、ますますやんやの拍手、歓声であった。こんなことで、芝居小屋は大盛況になり、左助座長もご機嫌続きであった。

座長の娘、チヌは18歳でチャムより3歳年上、ききょうは15歳でチャムと同じ年であった。チヌはチャムに好意を抱いた様子で何かと手助けをしてくれた。左助も行く行くはチャムとチヌを夫婦にして、チャムに座長を継がせてもいいなと思うようになった。

座長は、「ここ浜松は徳川様が新たにお城を作った町で治安もよく、チャムも加わってくれて、いい芝居をすることができた。次は尾張に行こう。尾張も日の出の勢いの織田様のお膝元にぎやかな市が立っている。尾張で芝居小屋を開いて、もう一儲けしよう」と一座に声をかけた。チャムも尾張の町や、父から聞いていた信長様を早く見たくて浮き浮きしていた。一座は芝居小屋を片付けて、尾張に向った。

町に入るとすぐ、通りの建物や、道行く人々の服装や表情から、この町にはお金がある、勢いがあると感じられた。座長は「織田様は昔は、おおうつけと呼ばれていたけれど、今は、我らの一座と同じく日の出の勢いだ。今は北陸の浅井様と朝倉様の連合軍と戦の最中だ。でもこの町は織田様のお膝元だけあって活気に溢れている」と言った。

座長奎助の予想通り、芝居は大入りが続いた。チャムは主役を任せられ、その初々しい舞台を目当てに若い女達が毎日通ってきた。座長のチャムに対する信頼も日毎に増していた。チャムは役者で飯を食っていこうか、とも思ったが、自分の身代わりになって打ち首になった父への思いや、母から聞いた高貴の血のことを思い出し、お侍になって故郷に錦を飾りたいという思いとが交錯した。

大盛況の毎日だったが、座長が「尾張もこんなところで打ち上げだ。今度は京の都で芝居を張ってみよう。何といっても都の人は目が肥えているから、いい芝居をしないと返って尾張より儲からないかもしれない。それでもやってみるだけの事はある。勝負のつもりで行ってみよう」と、京への出発を命じた。

さすがに京の町に入ると、立派な建物が林立していた。平安の昔からの天皇のお屋敷や、お寺や市が並んでおり、チャムがこれまで見たどんな町とも違って、チャムを圧倒した。町に行く人たちの服装も垢ぬけたものだったが、浜松や尾張と比べると湧き立つような躍動感は感じられなかった。口の悪い町の人、「足利將軍はんも無気力で、信長はんなんか追われて、もうすぐ逃げはるんやないのかなあ」と噂していた。

座長の奎助はこの町の垢ぬけをした人たちにも受ける日本一の芝居興業をめざして、東寺のすぐ前に広がる弘法市に日の出座の旗を立てた。「さあ、チャム。ここは弘法大師さんが開かれたお寺だ。五重塔がええじゃろ。お大師さんの命日には市が立って特に賑やかになる。ここでいい芝居をしたら日本一になれるぞ。気張ってやろうぜ」と上機嫌だった。チャムの芝居もすっかり板について、京の若い女たちが連日通ってくれた。

芝居の休みのある日、チャムは京の町を見物していた。すると托鉢をしていた禅僧から声をかけられた。「そこの若い人。あなたは何をする人ですか？」「私の名前はチャムといい、日の出座で役者のたまごをしています」「私は曹洞宗永平寺の雲水で和道といひます。私は托鉢をしながら全国を回っていますが、あなたに会ったのは仏様のお導きかも知れない。あなたには吉相が見えます」「私は日本一の役者になれるのでしょうか？」「いや、もっと他の道のように」「他の道とは何でしょうか？」「そこまでは見えないな」僧は「また、縁があったらお会いしましょう」と言って歩き去った。

日の出座の芝居は相変わらず盛況が続いていた。座長奎介の娘チヌの心の中ではチャムと一緒に日の出座を盛りたてようとする思いが一層強くなった。芝居が休みの日、チヌはチャムを誘って京見物に出かけた。東山の清水寺にお参りをし、その後、祇園の町で食事をした。あたりが暗くなり、二人は何かわからない燃えるような気分になり、その夜、チヌはチャムに体を許した。16歳のチャムにとっては初めての体験であったが大人への壁を乗り越

えた。

翌日から、チャムは「チヌさんと一緒になり、この一座で日本一の役者になるか、あのお坊さんが言ったとおり、他の道に進んで立身出世をして故郷に錦を飾るのか」と、悩む日々が続く芝居にも身が入らなくなっていました。座長奎介は「チャム、お前この頃、覇気が見られないぞ。何かおかしいぞ」と問いかけた。「親方、済みません。恩を仇で返すようなことをしてしまいました。日本一の役者になろうと頑張ってみましたが、どうしても父母への思いを断つことができません。私は故郷でお侍の子供を殺したため、父が身代わりになって打ち首になり、私は母を高岡に残して故郷を追い払われました。親方、私はやっぱり他の道を進み立身出世をした姿を母に見せたいと思います。本当に済みません」

座長は自分と娘の夢が破れてがっくりと力が抜けるのを感じたが、チャムの将来を思い「わかった。これからも何かの縁があればまた会おう。元気でお前の道を進んで行け」とチャムの道を許した。チヌも、まだ未練はあったがチャムの志の強いことを思い、「さようなら。お元気で」と涙ながらチャムを見送った。

大坂の町へ

チャムは京から淀川を下って大坂の町へ入った。町の中心は石山本願寺であったが、織田信長から攻められ町中には厳しい雰囲気のみなぎっていた。しかし、石山本願寺の持つ膨大な富を受けて町は活気にあふれていた。

チャムが大坂の町を歩いていると、通りに面して鉄砲造りの作業場があった。中を覗いてみて、チャムは新しい世界を嗅ぎ取った。「親方、ちょっと見せていただけますか？」と声をかけると、「おお、若い。名前はなんというんだね？」「チャムと言います」「わしは雑賀太市と言うんだ。ちょうどよかった。今、新しい鉄砲を作っているところで、人手がほしかったところだ。ちょっと手伝ってくれるかな？」と声が戻ってきた。チャムは、面白そうな仕事だと思い、「親方、手伝わせてください」と、言ってそのまま作業の手伝いを始めた。

雑賀太市は本願寺の為に鉄砲を作っていた。織田信長の攻撃に対抗するには鉄砲が必要で、石山本願寺は雑賀太市に期待していた。雑賀衆は紀州に本拠を置く技術集団で、昔から刀鍛冶等を多数輩出しており、ポルトガル人が日本に鉄砲を伝えて以来、鉄砲作りに励んでいた。

太市は作業の合間に自分が作っている鉄砲のことをチャムに教えた。「これからの戦いは鉄砲の性能と数量と戦い方が勝敗の帰趨を決定するんだ。今までの火縄銃は発射するのに時間がかかり過ぎるから、撃鉄を使って発射にかかる時間を減らす鉄砲を製作しているんだ。それに、鉄砲の銃身に螺旋を入れると弾が銃身の中で回転して弾筋が安定し遠い距離に正確に飛ぶようになるし、弾丸ももっとよく飛ぶ形にするように工夫しているんだ」チャムは目を輝かして言った。「私も親方の新しい鉄砲づくりのため、一生懸命働きますので、いろいろ教えてください」

そんなある日、チャムは太市からことづけを頼まれた。「チャム、これから堺の橋屋宗久のもとへ行って外国から入ってきた新しい鉄砲と、鉄砲製作の材料を買ってきてくれ」

橋屋宗久は太市の旧知で富裕な商人であった。堺に到着したチャムが見たものは、豪壮な商家のほかに、港に停泊する多数の船だった。「ううん、すごい、これが南蛮船か。これなら随分大量の物も運べるし、遠い外国からもやって来られるのだ。太市親方はこれを教えたかったのだな」

宗久のもとへ行き、太市からの伝言を伝えると、宗久は機嫌よく応対してくれた。また、宗久は、チャムに外国から輸入された珍しい品々を見せてくれた。チャムは新しい経験に打たれて震えたが、「これは、あの禅僧が言っていた、他の道につながるものではないだろうか」と

の思いに至った。堺での所用を済ませたチャムは、大坂の雑賀太市のもとに戻り、鉄砲づくりの手伝いを続けた。

そんなある日、太市がチャムに「私はこれまで石山本願寺に鉄砲を納めてきたが、今の織田信長の圧力には抗することができない。本願寺は間もなく信長に屈服するだろう。私は、これから堺に移り鉄砲の改良を続けるが、お前は新しい道を進みなさい。最近、織田信長が、浅井軍を破ったが、その部下に木下藤吉郎という武将がいる。藤吉郎は信長から浅井の旧領地を貰い、湖北の長浜に築城中で、名前も羽柴秀吉と改名した。羽柴は百姓の出身だが、中々の人物だと評判が高い。チャムが仕える主人として、この勢いのある羽柴秀吉がいいのではなかろうか。秀吉も勢力を拡大するために、多数の人を必要としているはずだ。長浜へ行って門を叩いてみなさい」と言った。

チャムは、雑賀太市に「いろいろ教えて貰い有難うございました。ご縁があれば、またよろしく申し上げます」と、礼を言って大坂を去った。

羽柴秀吉に仕官

チャムは湖北の長浜に来ていた。高岡を追放されてから3年、チャムも18歳の青年になっていた。長浜の町は羽柴秀吉が織田信長から浅井長政の旧領を与えられ、そこに築城中で、道は埃が舞い、築城の資材を乗せた荷車が行き交い、仕事を求めて流れ込んできた人たちでごった返していた。

チャムはこの町にふつふつと湧き上がるような空気が流れているのを嗅ぎ取った。「ここには俺にも出世できる隙間がありそうだ」と、チャムは思った。

町中に立て札があり、羽柴秀吉が足輕を募集していた。それには、「力の強い若者を足輕として採用する」と、書かれていた。指定された場所に出かけてみると、強そうな浪人風の男たちが多勢詰めかけていた。選抜は相撲の勝ち抜きで決められた。チャムはまだ18歳だったが、もともと、相撲は強かったので軽々と勝ち抜き、足輕として採用された。

また、チャムは上杉の侍であった父のタモと母うめから読み書きをならっていたため、百姓出のただの力自慢とは、その能力には明らかな差があった。チャムは雑賀太市の下で鉄砲作りの手伝いをしてきたので、採用の係の侍に「私は鉄砲の事をよく知っています。ぜひ、鉄砲組に入れてください」と、熱望したが、体力が優れていたため槍組に配置された。

足輕として秀吉の部下になったチャムは、名前を改めた。父親が上杉の侍であったときに名乗っていた苗字である津山とし、名前を龍之介と変えた。龍は立山にぶつかる冬の雪雲を思い出し、また、龍のように天まで駆け上がる気持ちを込めて名乗った。

足輕として、戦いにおける陣形の作り方、馬上の武士との協力の仕方を一通り習った後、龍之介は羽柴軍の槍組の一員として長篠の戦いに初出陣をし、早速手柄を挙げた。初陣での活躍で褒美をもらい、龍之介はようやく一人前の生活ができるようになった。

龍之介のチヌを妻に迎えたいと願う気持ちは、今も変わりが無かった。殿に暇をもらい京へ出て、チヌを探した。東寺の前の弘法市に行ってみたが、そこには日の出一座の姿はなく、次に、龍之介は尾張に探しに行った。「あった。ここだ」尾張の市に日の出座の旗が立っているのを見つけた。中に入ると相変わらず座長の奎助がいた。

「親方、ご無沙汰していました。チャムです。京では折角の親方のご恩に添えず、一座を離れてしまいましたが、今では、羽柴様の足輕になり、手柄を挙げて生活ができるようになりました。今は津山龍之介と名乗っています」「おお、立派になったじゃないか」「親方、実はチヌさんと所帯を持ちたいと、こうして日の出座を探し当てました」「いきなり、所帯を持ちた

いと言われても……。チヌはいるが……」 「チヌさんがおられるなら、ぜひお会わせ下さい。お願いします」

座長はびっくりしながらも妻のフキと娘のチヌを呼んだ。「チヌ、お前、チャム、いや龍之介さんと一緒になりたいか？」 悲しい別れから3年経ったが、チヌは心の中でまだチャムを愛していた。深くうなずいたのをみて奎助は「チャム、いや、龍之介さん。もったいない話です。年上の女房になります、よろしくお願いします。私たちはこうしていろいろな町で小屋をかけていると、世の中の事がよく見えることがあるので、必要な時には何なりと話をかけてください」

龍之介は足軽として手柄を挙げて羽柴の殿から頂いた褒美を座長に手渡し、チヌとともに長浜に戻った。

また、龍之介は故郷高岡で苦勞をしている母に手紙を書いた。「お母さん、ご無沙汰しています。お元気ですか？ 故郷高岡を離れて早や4年が経ち、私は19歳になりました。今は羽柴秀吉様の足軽になり、父の名を継いで津山龍之介を名乗っています。また、長い間、お世話になっていた日の出座の座長の長女、チヌさんと結婚をしました。お母さんには、ご苦勞をおかけしましたが、今ではお母さんと一緒に生活できるようになりました。ぜひ、こちらにお出でください」

母は「チャムよ。津山の名前を継いでくれてありがとう。お父さんも大変喜んでおられると思いますよ。私は、高岡の町でアメ売りや、ぬいもの、近所の子供に読み書きを教えたりして、何とか生きてるので心配しないでいいよ。お前はまだまだ厳しい暮らしが続くだろうし、高貴の印はまだ私が持っているほうが良いでしょう。私は、お前の行く末をお守りくださるよう、毎日、立山さまにお願いしているので、お前も正しい心をもってチヌさんと共に生きて行きなさい」と、手紙を返してきた。

チャムが足軽の地位を得たとき、石田三成も秀吉の部下になっていた。龍之介が18歳、三成はまだ14歳であったが、三成は長浜の郷土の出身であり、父も兄も秀吉の家来であったため、秀吉の小姓として足軽の龍之介と比べてはるかに高い地位についていた。

秀吉に足軽として召し抱えられた龍之介は、その後の戦いで常に最前線で戦った。信貴山城の戦い、中国攻めでの赤松氏との戦い、翌年には、毛利氏との攻防に最前線で戦った。引き続き、播磨三木城攻めに参加、その翌年には、吉川経家の鳥取城攻め、続いて淡路の岩屋城攻略に参加した。息継ぐ間もなく、翌年には、備中高松城の水攻めに前線で戦った。

これらの戦いの中で、龍之介は槍組の足軽だけでなく、知恵を働かせて戦勝を獲得したため、秀吉から「龍よ。龍よ」と目をかけられ、伝令として戦闘命令の伝達や戦況の報告にも当たり、足軽から部下持ちの侍に昇進した。

戦いが続く中、チヌと結婚して4年が経ち、二人に待望の赤子が産まれた。龍之介は24歳、年上のチヌは27歳になっていた。赤子は色白の可愛い娘で、立山の雪を思い出して、ゆき乃と名づけた。チヌは「ゆき乃が生まれてくれて、龍之介様の亡きお父様、お母様、私の父も母も皆、喜んでくれるでしょう。大事に育てます」と、大喜びであった。

天正10年、本能寺の変で織田信長が明智光秀に殺された。このとき、秀吉は備中高松城を水攻めにしていたが、事件を知るとすぐさま高松城城主・清水宗治の切腹を条件にして毛利輝元と講和し、京都に軍を返した。秀吉勢の出現に驚いた明智光秀は山崎において秀吉と戦ったが、兵力で劣る光秀方は大敗を喫し、光秀は野伏せりに討たれ命を落とした。

龍之介にとって織田信長は秀吉が崇拝する雲の上の人であったが、日頃から新しい世の中を作り出すその超能力には、強い憧れを抱いていた。龍之介は、「信長公が亡くなられたこれからの世の中は、きっと、今お仕えしている秀吉様が切り開いて行かれるであろう」と、確信した。

羽柴秀吉が明智光秀を討ち、京で権力を確立した時期に、清洲城で信長の後継者と領地の分割を決める会議が開かれた。織田家筆頭家老の柴田勝家と、明智光秀討伐で戦功があった秀吉が対立し、天正11年、賤ヶ岳の戦いになった。この戦いでは石田三成も津山龍之介も功績を上げた。その後、羽柴秀吉が織田信雄・徳川家康連合軍と戦った小牧・長久手の戦いでも、二人はともに秀吉の信頼できる武将として活躍した。この戦いは鉄砲による本格的な戦闘で、小勢力で秀吉軍と互角に戦った徳川の評価を高めた。

龍之介は秀吉の信頼が厚い側近の武将として、石山本願寺の跡地に築城された大坂城に詰めた。一方、石田三成は近江国蒲生郡の検地奉行となった。ある日、龍之介らが大坂城で酒盛りをしていた時、三成が「龍之介と自分は家柄が違う。」と言った。龍之介は、「家柄など問題はない。そのことは大殿の出身を見ればわかるだろう」と言い返し、つかみ合いの喧嘩になった。結局、その場は収まったが、その後の二人の間には何かしっくりいかないものがあった。

この時期、龍之介に待望の長男、晋之介が生まれた。長女ゆき乃は3歳になっていた。龍之介は28歳、気力、体力、知力に溢れていた。妻のチヌが30歳を超えていたので、何とでも男の子を願っていたので心の底から嬉しかった。チヌは「この子は龍之介様より、

ももっとも強いお侍さんになってほしいものです」と目を輝かせた。

ある日、龍之介は堺に雑賀太市を訪れた。根来衆・雑賀衆は小牧・長久手の戦いで、家康側についたため秀吉から厳しく攻められていた。龍之介にとって雑賀太市は、少年時代に鉄砲の作り方を指導してもらった親方であり、今は雑賀に厳しい態度をとる秀吉の武将として、龍之介は難しい立場ではあったが、少年時代の御礼とともに、これから鉄砲隊が戦場を制する時代での協力の接点を探しに来たのである。

太市は6年間を経過して、すっかり立派な武将になった、チャム改め津山龍之介にすっかり感心した。「おお、津山龍之介殿になられましたか。立派になられて、秀吉殿の武将とは大出世でございますなあ」「太市殿、大坂にいた頃は親方の鉄砲製造所で大変お世話になりました。最近では小牧・長久手の戦いでも、鉄砲隊がすっかり戦いの中心になりました。親方の所で学んだことが随分役に立ちました」

「なあに、龍之介殿。秀吉殿や家康殿が今、戦いで使っている鉄砲は、未だに先込めの火縄銃で、弾を撃った後、次の弾を撃つまでの時間がかかり過ぎる。私の元込め式の鉄砲は完成というところまで来た。これだと火縄銃より半分以下の時間で次の弾を発射できる。敵が撃ってくる前に仕掛けることもできるし、何より沢山の弾を敵に撃ちこむことができる。元込め式の鉄砲が戦いの場に出ると、戦いの様子も随分変わるだろうよ」と、太市はほぼ開発を終えた元込め式の鉄砲を見せながら言った。

「そうだ龍之介殿、面白い人物を紹介しよう。アントニオという南蛮人で、堺の町が大好きな青年がすぐ近くに住んでいる」龍之介は「この堺には興味のあることが沢山ありますね。ぜひ、その南蛮人の青年を紹介してください」と言った。雑賀太市の屋敷から歩いて数分のところに、アントニオのいる南蛮屋敷があった。アントニオは碧眼の南蛮人で、貿易船で堺にやって来て、今では、日本に長く住んでみようと思いを決めたそうである。

龍之介はアントニオに「なぜ、日本に長く住みたいと思ったのか？」と聞いてみた。アントニオは「私は黄金の国ジパングへの憧れを持って日本へ来ました。渡航する金もなかったもので、船乗りの手伝いをしながらここまで来たのです。私はイエズス会の人たちと違って日本に宗教を広めようというつもりはありません。日本の珍しいものを、私の母国ポルトガルに売り、またポルトガルの進んだ技術をもとにした品物を日本に売って、交易により日本もポルトガルも、そして私も共に繁栄して行くことができそうです。また、ここ堺の人は大変親切で、外国人に対しても温かい心で接してくれるので末長く住みたいと考えています」と答えた。龍之介は、この人物に興味を持った。

秀吉の天下統一

天正13年秀吉は紀伊に侵攻して雑賀党を各地で破り、最後は藤堂高虎に命じて雑賀党の首領、鈴木重意を殺すことで平定した。龍之介は秀吉軍の足軽になる前、雑賀太市の作業場で鉄砲作りの仕事を手伝い、先頃も堺に出掛けて太市から指導や協力を受ける約束をしたばかりであり、自らが雑賀攻めの武将であることに心が痛んだ。しかし、一武将の力では秀吉の天下統一への衝動には如何ともすることが出来なかった。

同年、秀吉は四国の長宗我部元親に対して、羽柴秀次を総大将として総勢10万という大軍を送り込んだ。この戦にあたって秀吉は、「龍よ。秀次が長宗我部を討伐できるよう、しっかり働いてこい」と、激励して送り出した。龍之介は羽柴秀次軍の武将として抜群の働きをし、羽柴秀次は長宗我部元親に勝利し、秀吉は元親に土佐のみを安堵した。

総大将の羽柴秀次から「龍之介殿、この度の戦いぶりは実に大したものだった。秀吉様にも戦いぶりを報告しておくぞ」とお褒めの言葉をいただき、龍之介は「秀次様、この度の勝利おめでとう御座います。お役に立つことが出来て大変光栄です。秀吉様もさぞ、お喜びのことと思います」と、喜びの言葉を返した。

天正14年、秀吉は豊臣の姓を賜り、年末には太政大臣に就任した。天下統一の手を緩めることなく、越中の佐々成政に対しても富山の役を開始し、ほとんど戦うことなく成政は秀吉に降伏した。

翌年には九州の島津義久を20万の大軍を率いて侵攻して降伏させ、帰り道には備後へ亡命中の足利義昭を京都に連れ帰り出家させた。こうして豊臣秀吉は西日本の全域を服属させた。また、京の北野天満宮で大茶会を開催したり、聚楽第に後陽成天皇を迎え華々しく饗応し、徳川家康らの有力大名に忠誠を誓わせた。

龍之介も天下統一の戦では最先端で働き、その戦功が認められて、大茶会に呼ばれた。大茶会での振る舞いをどのようにすればよいのか分からないところもあり、秀吉の茶の師匠である千利休に聞いてみた。「利休様、私は無骨もので、このような立派な大茶会での振る舞い方がよく分かりません。どのように振る舞えばよろしいのでしょうか?」「龍之介殿、心配はご無用。あるがままで茶を楽しめばいいのです。茶のたしなみと言うのは、そういうものなのです」利休の教えを受けて龍之介の心は軽くなった。

大茶会の席で、龍之介は徳川家康から声をかけられた。「津山殿、秀吉様の戦では、なかなかの働きをしておられますな。感心して見ておりますよ」家康から声をかけられ、すっかり

上気した龍之介は「家康様、龍之介はまだまだ秀吉様の期待に応えられるところまでは御奉公出来ていません。ところで、私は秀吉様のところで足輕に召し上げていただいたのですが、その前には、家康様のところで召し上げていただくのを待っていたのです。しかし、機会がありませんでした。うまく機会があつていれば、家康様の下で働かせてもらっていたかも知れませんね」と答えた。「それは面白い話ですなあ。機会があれば、一緒に働きましょう」と家康から話をされて、龍之介にとって楽しい大茶会となった。

天正16年には、秀吉に滅ぼされた浅井長政の娘で、織田信長の妹お市の方の娘でもある淀殿が秀吉の側室となった。淀殿は、翌年20歳で秀吉との間に鶴松を産み、秀吉は大いに喜んで鶴松を後継者に指名した。

大坂城に詰めていた龍之介は、淀殿に「この度は、誠におめでとうございます。我らにとつても、鶴松様のご成長が楽しみです」と、お祝いの言葉を贈った。淀殿はお礼の会釈をして、龍之介に質問をした。「龍之介様にはお子様はいらっしゃいますか?」「はい、妻チヌとの間に10歳の娘ゆき乃と、6歳の息子晋之介がおります」「それはお楽しみなことですね」と、淀殿は鶴松に目をやりながら答えた。その後、龍之介は故郷である高岡の話や放浪時代の話をし、淀殿は興味深げに耳を傾けた。

淀殿も「私も茶々と呼ばれていた頃、母が柴田勝家様と再婚した折に、北の庄城で暮らししました。日本海沿いの地でしたので、冬は寒かったけれど、春から秋まではたいそう美しく、暮らしやすいところでした。高岡もきっとそうなんでしょうね」などと、懐かしげに話した。

豊臣秀吉は天正18年には関東へ遠征、後北条氏の本拠小田原城を包囲し、3か月の後に北条氏政・北条氏直父子を降伏させた。小田原城を包囲中に、伊達政宗ら東北の大名も秀吉に恭順の意を示した。これによって、秀吉の天下統一事業が完成した。

龍之介は小田原攻めでも豊臣秀次軍の武将として戦功をあげた。大坂城に帰った龍之介に会って淀殿は「この度は立派に戦功をあげられ、おめでとうございます」とねぎらいの言葉をかけてくれた。龍之介も淀殿に「お褒めの言葉ありがとうございます。淀の方様、鶴松様が一日も早く、お世継ぎに御成育される事をお祈りします」と答えた。

ところが、翌天正19年鶴松が病死した。淀殿の落胆ぶりは傍で見ても気の毒な程であった。龍之介は淀殿に「鶴松様がお亡くなりになり、さぞ、お気を落とされたことでしょう。お気持ちはなかなか晴れることも、かなわないかとも思いますが、お元気をお出してください」と慰めの言葉をかけた。秀吉は後継者に指名していた鶴松が病死したため、甥の豊臣秀次を家督相続の養子として関白職を譲った。

この年、茶人千利休が突然秀吉の勘気に触れ、堺に蟄居を命じられた。前田利家や、利休七哲のうち古田織部、細川忠興ら大名である弟子たちが奔走したが助命はかなわず、京に呼び戻された利休は聚楽屋敷内で切腹を命じられた。

龍之介は茶の道を教えてくれた千利休がなぜ切腹を命じられたのかを考えた。「殿はこれまで利休様を重用してこられたが、堺と結び付きが強くなりすぎたのを警戒されているのだろうか。堺の勢力が伸び、利休と堺の連携が絶大になって秀吉様の権力に反抗すると感じられたのであろうか。あるいは、年をとられて、癩癩のこらえ性が無くなってしまわれたのか？」

龍之介は千利休の切腹の陰に秀吉の側近として権力を握っていた石田三成の姿を感じ、堺の雑賀太市やアントニオとの関係が三成の謀りごとの種にならないよう細心の注意を払った。

続いて秀吉は、東北で南部氏一族の九戸政実が反乱を起こしたことを受け、豊臣秀次を総大将として九戸討伐軍を派遣し、九戸氏一族を斬首にし、乱を終結した。龍之介はここでも秀次軍の武将として活躍した。龍之介は総大将の秀次から「龍之介殿、この度もまた良い働きをしてくれた。太閤様にしっかりご報告をして、ご加増をお願いしておくぞ」とお褒めの言葉を貰った。

文禄元年、秀吉の天下制覇への意欲はますます高まり、明の征服と朝鮮の服属を目指して宇喜多秀家を元帥とする16万の軍勢を朝鮮に出兵した。初めのうちは朝鮮軍を撃破し、漢城、平壤などを占領するなど圧倒したが、各地における抵抗や明の援軍の到着によって戦況は膠着状態となった。

文禄2年に淀殿が秀頼を産むと、秀吉は家督相続の養子として関白職を譲った豊臣秀次を疎ましく感じだした。そして、文禄4年には秀次を乱行ありとの理由で廃嫡し、高野山へ追放し、後に謀反の容疑で切腹を命じた。秀次の補佐役であった古参の前野長康らも切腹処分となったほか、秀次の妻子などもこの時処刑された。

文禄4年8月、秀吉の命令により秀次の首は三条河原にさらされ、側室たち39人の首は次々と切り落とされ、遺体は巨大な穴に投げ捨てられた。龍之介も切腹こそは逃れたものの、豊臣陣営の武将としての地位をはく奪され、追放されてしまった。

追放されてしまった龍之介は、自分のことをこう振り返った。「自分は秀吉様が天下人になるために、秀次様の軍の武将として各所の戦に派遣され、獅子奮迅の戦をしてきたつもりだ。しかし、秀吉様は憎い秀次様の側に自分が立って、秀頼様に害をなすのではないかと思いつまされたのだろう。自分としては思い当たることのない濡れ衣だ」

龍之介はこうも思った。「自分は淀殿から優しい言葉をかけられ、また、秀頼様のご成育を心から願っていたのに、追放されるというのは何とも情けない。秀吉様から出された追放命令

の後ろには、側近のあの石田三成がいるのではないだろうか？」

龍之介はこの時、40歳。思えば、18歳で羽柴秀吉の足軽となって以来、秀吉の為に粉骨砕身、戦場を駆け巡ってきた。そして、その功績を認められ、武将にまで出世させてもらった。しかし、今、利休様も、秀次様も切腹され、自分は信じ切っていた太閤秀吉様から追放を命じられた。

龍之介はしみじみと不思議な気持ちを感じていた。「太閤様が尊敬しておられた信長様がよく舞っておられた、あの『人間五十年、下天の内をくらぶれば夢まぼろしの如くなり、ひとたび生をうけ滅せぬ者のあるべきか』の言葉がちょうど今の自分に降りかかって来ている。それにしても、こんな所で栄達から転落してしまって、高岡で自分を待っている母にとんだ親不孝をしてしまうたわ」

龍之介の妻チヌは「龍之介様は太閤様のために、秀次様とともに精一杯戦われました。このことに嘘いつわりはありません。また、多くの武将の方々が切腹なされた中で、追放で許されたのはありがたいことでございます」と、慰めの言葉をくれた。

龍之介は気を取り直して「切腹になってもおかしくない中で、折角貰った命だ。部下たちにも生きながらえてもらわなくては」と、部下たちに生活の資金を分配し、それぞれの道を探してもらうこととし、ごく少数の家来と共に京に向かった。

「高岡の龍」軍団を結成

文禄4年8月、龍之介は京の町にいた。「秀吉様の陣営から離れて、少人数で田舎にいたのでは野伏せりに身包み剥がされ殺されるのが関の山だろう。京に居る方が余程安全だろう」

龍之介は妻チヌの父である杢助の屋敷に世話になった。杢助は京の四条の常設芝居小屋となった日の出座の座長になっており、杢助の屋敷は芝居小屋から近く、玄関は狭いが奥は豪壮な邸宅になっていた。日の出座はチヌが龍之介に嫁いだ後、妹ききょうが婿を取り、婿は石川万之助の名前で主役となって繁盛していた。

杢助は「龍之介様、この度は秀吉様からあらぬ疑いをかけられて、大変でございましたね。一段落つくまでごゆっくりお過ごしください」「お義父様から、そう丁寧な言葉をかけられると困ってしまいますが、一緒に行動してくれた部下の侍ともども、申し訳ありませんが、しばらくお世話になります」

ある日、龍之介は杢助の町家を出て、次の一手を考えつつ、京の夏のじりじりと照る太陽の下を歩いていた。すると、めずらしく和道雲水に会った。「これは雲水殿、久し振りでございます。雲水殿から教えていただいたとおり、他の道を進み、大変出世をしましたが、秀吉様からあらぬ疑いを受け、このように元のところまで舞い戻ってしまいました」和道雲水は「いやいや、龍之介殿。あなたは豊臣秀吉殿の武将としていい働きをなされました。この度のご受難は一時の運命でしょう。あなたを求めている人がいます」と、言って懐から油紙に包んだ徳川家康のからの手紙を差し出した。「私は、全国行脚の托鉢修行中に家康様にお会いして以来、そのお人柄に敬服しご親交を結ばせていただいております」

家康からの手紙には「この度は、あらぬ疑いをかけられ、大変でございました。しかし、龍之介殿のお手柄と誠実さは疑うべくもありません。私にお役に立てることがあれば何なりともご相談ください」と書かれてあった。和道雲水は「龍之介殿。あなたには依然として吉相が見えています。北国街道に旗を立てられるのがよいでしょう」と言い残して去って行った。

龍之介の心の中に光が差し込んだ。杢助の屋敷に戻って、雲水の言葉を考えていた。「北国街道の抑えは、秀吉殿の足輕にいただいた長浜城だが、今は内藤信成、信正が入城しており、今、自分についてきてくれた手勢だけでは手出しができない。何か名案はあるだろうか」

考えた末に、龍之介に名案が浮んだ。「長浜城の北、虎御前山の北に小谷廢城がある。淀殿が生まれた城で、その後、淀殿の父である浅井長政と朝倉義景の連合軍が織田信長軍と戦って敗れた後、廢城になっている。規模の小さな山城ではあるが、堅固でもあり、武装軍

団の拠城としての収容能力もあり、北国街道を制することもできる」

龍之介が義父の空助に「小谷廃城を修復して『高岡の龍』軍団の拠城として、この時代を勝ち抜きたいのです」と打ち明けると、空助は両手を上げて賛成した。「それでこそ龍之介様だ。他の武将の部下としてではなく、小なりとは言っても、独立した軍団の主として活動される事こそ龍之介様の目指される道じゃ」と賛意をのべた。空助は早速、古くからの知り合いである近江坂本の石工集団、穴太衆に小谷廃城の再構築を依頼してくれた。

龍之介は堺へ行き、雑賀太市に話をした。「先般は秀吉殿の部下としての雑賀攻めに参加しました。太市殿には大恩を受けながら、雑賀衆の人々を破滅に至らしめたことはどう謝っても、謝りきれません」これに対して太市は「これも時代の所為で、龍之介殿でも如何とも出来なかったでしょう」と、寂しそうな顔つきで答えた。龍之介は、「私は、秀吉殿の陣営から追放されてしまいました。しかし、今、私は『高岡の龍軍団』を立ち上げたいと思っています」と話した。

太市も大いに賛成し、龍之介に対して最近の鉄砲作りの様子を述べた。「今の世の中を見ると、長篠の戦いでも、小牧・長久手の戦いでも鉄砲隊が戦いの勝敗を決める重要な戦力になっています。しかし、今の鉄砲隊は、火縄銃を使用しているので弾の発射に時間がかかり過ぎています。私はここ堺で、前に見てもらった元込め式の鉄砲をもとに連発式の鉄砲を作り上げましたぞ」

太市は続けた。「連発銃の原理は、弾を撃ち出した時の力を利用して次の弾を込めることです。今度作り上げた鉄砲では20発の弾を連続して撃つことが出来るようにしました。また、鉄砲の銃身のなかに螺旋を切る製造技術も随分進んできましたぞ。私は連発銃を実戦に耐えられるよう、多数の弾を撃っても故障を発生させにくいところまで持ってくる事ができました。龍之介殿、『高岡の龍軍団』は連発銃を使用する少数精鋭の部隊にされるのがいいでしょう」

また、太市は「あなたも参戦した秀吉殿の雑賀一族征伐の後、私は生き残った優秀な雑賀の若者達を堺に引き取り、一緒に連発銃を作り上げました」と、話した。龍之介が「太市殿、これから龍軍団に連発銃を使用した戦い方を指導してください」と頼みこむと、雑賀太市は「いいでしょう。やってみましょう」と快諾した。

太市は龍之介に「以前紹介した、南蛮人アントニオの家へ行ってみましょう」と提案した。アントニオは、雑賀太市の鉄砲製造所の近く、堺の町中に大きな屋敷を構えていた。「なかなか立派な屋敷に住んでおられますな」と話しかけると、アントニオは「雑賀様のご指導のお

陰で、日本での交易の仕方を学びました。今では、堺でも一、二の商人になりました。龍之介様のお役に立つことができるようでしたら何でもいたしますので、ご遠慮なくお話しください」と、協力を約束してくれた。

強い味方を得た龍之介は早速、部下集めを始めた。京についてきた家来たちの働きによって、秀吉陣営から追放された時に別れた部下や、秀次様の切腹時に連座した前野長康、木村重茲等の武将の家来たちにも声をかけ200名余りの精鋭を集め、小谷城において『高岡の龍軍団』を旗揚げした。

『高岡の龍軍団』は雑賀太市から提供された連発銃を用いて戦闘の方法を考えつつ、その訓練を進めた。連発銃は銃身の中に切られた螺旋により、素晴らしい命中性能を示した。また、弾の発射間隔が短くなり、20発の連発が可能になったことにより、従来とは全く異質の威力を持つ武器となった。火縄銃隊を2コ組に分けて、交互に発射するという従来の戦法は、この連発銃を用いた戦法と比べると赤子のように見えた。

『高岡の龍軍団』の訓練が続けられていたある日、堺からアントニオがやってきた。龍之介は「アントニオ殿、軍資金のことでは大変お世話になっています。『高岡の龍軍団』の訓練もお蔭さまで順調に進んでいます。今日は一体何のようでお出でですか？」と問った。

アントニオは「近頃、堺ではキリシタンに対する締め付けが強くなってきています。私は交易に興味があり、キリシタンの布教には興味が無いのですが、それでも疑いをかけられることが時々起っています」

龍之介は「アントニオさん、いつも軍資金を提供してもらって大変ありがたいのですが、太閤関白様もキリシタン禁制の方向へ動いているし、あなたが日本で交易出来るのはもう限界かも知れませんね」と言った。「私は、堺に来て日本が好きになってしまい、日本人になろうと決心しました」「アントニオさん、あなたの目が碧いのは何ともできないが、髪の毛は黒く染めることもできる。もし、本当に日本人になりたいと思っているなら私に考えがある」「本当に日本人になりたいのです」

龍之介は、城中の奥の間へ行って、妻のチヌと娘のゆき乃にアントニオの話をした。ゆき乃は17歳で、目の中に入れても痛くない子ではあるが、もう結婚してもいい時期が来ている。「どうだ、ゆき乃、アントニオさんの妻になるか？」「アントニオ様は冒険心をお持ちで、日本人になろうとなさっています。もしアントニオ様がよろしければ私としては嬉しくお受けしたいと思います」と、ゆき乃は殊勝に言ってくれた。

龍之介は娘、ゆき乃を連れてアントニオのところへ戻ると、「アントニオさん、日本人になるた

めに、私の娘ゆき乃と結婚し、日本人の名前を名乗るという道があります。この道はどうですか？」「龍之介様、ありがとうございます。日本人になるだけでなく、龍之介様の姫様と結婚までできるという幸福を神に感謝したいと思います」「それは良かった。それでは、私の息子となりなさい。名前は私の津山の名を継ぐのではなく、アントニオからとって安東次郎と名乗られるがいいでしょう」アントニオ改め、安東次郎とゆき乃は小谷城でささやかな祝言をあげ、堺へ旅立った。

この頃、豊臣秀吉は小早川秀秋を元帥として14万人の軍を朝鮮へ再度出兵した。しかし、蔚山城での苦戦を経て、秀吉は6万4千余の将兵を朝鮮南部に残し防備を固めさせる一方、7万余の将兵を本土に帰還させた。

慶長3年、秀吉は病に伏せるようになり、その病状は悪化していった。自分の死が近いことを悟った秀吉は伏見城に徳川家康ら諸大名を呼び寄せて、わが子の秀頼の後見を依頼した。徳川家康・徳川秀忠・前田利家・前田利長・宇喜多秀家・上杉景勝・毛利輝元ら五大老及びその嫡男らと五奉行のうちの前田玄以・長束正家に宛てた遺言書を出し、彼らは起請文を書きそれに血判を付けて返答した。

秀吉は五大老宛てに二度目の遺言書を記した後、伏見城でその生涯を終えた。

秀吉が死去すると、五大老や五奉行によって全軍の朝鮮からの撤兵が決定された。豊臣氏の家督を嫡男の豊臣秀頼が継いだ。大老徳川家康が次の天下取りを狙う行動を顕わにした。

家康の天下取りの動きに対抗して、石田三成は家康を暗殺しようとしたが失敗した。また、家康は三成と対立関係にあった福島正則や加藤清正、黒田長政らと次々と縁戚関係を結んで行った。

龍之介は『高岡の龍軍団』を鍛えながら、秀吉亡き後を見ていた。龍之介は、「自分を豊臣陣営から追放した背後に三成の存在を感じざるを得ない。また、龍軍団内の兵士の多くも豊臣秀次切腹に連座した武将の家臣たちであり、龍軍団は家康様の陣営で働くことになるであらう」と考えていた。

家康と互角の勢力を持っていた前田利家が病死すると、三成と対立関係にあった武断派の加藤清正、福島正則、黒田長政、細川忠興、浅野幸長、池田輝政、加藤嘉明の7将が、石田三成の大坂屋敷を襲撃した。しかし三成は事前に佐竹義宣の助力を得て大坂から脱出し、伏見城内に逃れていた。そこで仲裁に乗り出した家康により和談が成立し、三成は五奉行からの退隱を承諾し、三成は家康の次男、結城秀康に守られて佐和山城に帰城した。

龍之介が『高岡の龍軍団』を旗揚げしてから2年。 龍之介の長子、晋之介は14歳になり、戦闘訓練に参加するようになった。 この時代を生き抜くには、戦闘能力を鍛え上げることが必要だった。 晋之介は父、龍之介の熱い望みを背負って、立派に戦闘能力を向上していった。

慶長3年、安東次郎とゆき乃の間に長女が生まれた。 碧眼で紅毛の次郎と、黒髪で黒い瞳の夫婦の間に生まれた女兒は、例えようもないほど可愛かった。 龍之介は「初孫じゃ。 目出たい、目出たい。 それにたいそう美人じゃないか。 ゆき乃よくやったぞ」と、手放しの喜びようであった。 龍之介はこの孫にどんな名前がふさわしいか考えた末、「とき」と名付けた。「わが故郷には毎年、美しい鳥、朱鷺が飛来してくるのだ。 この子は朱鷺のように美しい。 この子が高岡の空を舞ってくれる日が楽しみだ」常に緊張の中に身を置いてきた龍之介にとって、ほっとする一時であった。

秀吉の亡き後、石田三成と徳川家康が勢力争いをしている間に『高岡の龍軍団』は連発銃を用いた戦闘方法の訓練を進め、ほぼ完成の域に到達していた。

また、連発銃を使った戦闘では、大量の鉄砲の弾を敵に撃ち込むため、弾の準備が必要になり、こちらは、安東次郎が提供する軍資金を使って雑賀衆が作り上げた。

関ヶ原の合戦

前田利家の死去や石田三成の蟄居により、徳川家康の天下取りへの動きが活発になった。三成は家康を排除すべく、会津の上杉景勝と密かに挙兵の計画を図り、上杉勢が家康に対して叛旗を翻したため、家康は諸大名を従えて会津征伐に赴いた。

三成は、これを東西から家康を挟撃する好機として挙兵を決意し、家康に従って関東へ行くとした大谷吉継を味方に引き込んだ。また、毛利輝元を西軍の総大将として大坂城に入城させ、同時に、家康の重臣・鳥居元忠が守る伏見城を攻め落とした。三成は伏見城陥落を諸大名に公布したが、家康ら東軍の反転西上が予想以上に早かったため、関ヶ原で野戦を挑むこととなった。そして、東軍と西軍による天下分け目の戦いである関ヶ原の戦いが始まった。

ある日、和道雲水が小谷城の大手門前に立った。「龍之介殿にお話がございます」「これは和道殿、家康様に何かございましたか？」「家康様は、『高岡の龍軍団』のことをお知りになり、ぜひ助力をお願いしたいとのことでございます」龍之介は今こそ、『高岡の龍軍団』が戦う時が来たのを感じた。「和道雲水殿、それで家康様は龍軍団をどうお使いになろうとなさっているのですか？」「家康様は本陣の最も重要な正面で働いてもらいたいというお考えです。軍団をまとめて関ヶ原の家康様の本陣にお越してください」

龍之介は200余名の兵を率いて、西軍が配置する北国街道を避けて、小谷城から山道を通って揖斐川へ出て、家康本陣に入った。龍之介が本陣に到着すると家康は、「津山殿、ご加勢まことにかたじけない。敵の西軍は毛利輝元を総大将に石田三成が中心となってわが軍と対峙しているが、わが軍より大きな勢力を持っております。是非、『高岡の龍軍団』のお力を借りたくお呼びしました。この戦いは天下分け目の決戦になるでしょう。龍軍団は、小なりといえども高い戦闘能力を持っていると聞き及んでいます。この戦いでは最も重要な正面を担当していただきたい」と待ち受けていた様子で呼びかけた。龍之介は「われら龍軍団の連発銃部隊の威力により、かならずや徳川様に勝利をもたらしましょう」と答えた。

三成の西軍が関ヶ原方面へ転進したのを知った家康も、即座に関ヶ原へ進軍した。そして、龍之介に対し東軍の先鋒として中央から天満山に陣を構える宇喜多秀家を攻撃し、更に笹尾山にいる三成軍を撃破するという大役を依頼した。

明日の決戦を前に龍之介は17歳になった息子、晋之助に言いかさせた。「晋之助、明日の初陣の相手は強敵じゃ。日頃の鍛錬で戦い方は身に着けたと言えるが、本物の戦は別物じゃ。最先陣で戦うことになるが、臆病にならず、さりとて出張らずに戦え。鉄砲の戦では、

どこから弾が飛んでくるやら分からない。うかつな死には不名誉じゃと心に決めてしっかり戦え」初陣の晋之助は、歴戦のつわものである父の言葉をしっかりかみしめた。

関ヶ原は早朝から深い霧が立ち込め、隣の軍の様子もわからない。そんな中、龍軍団は同じく家康から先鋒を命じられた福島正則の軍と並んで、龍の旗印を立ててじっと開戦の火蓋を切る機会をうかがっていた。やがて、霧も薄くなってきた頃、龍軍団は、西軍の主力である宇喜多秀家の部隊に向けて連発銃を発砲して前進した。その最前線には初陣の晋之介の姿があった。

これに対し精鋭の宇喜多隊も直ちに応射した。福島正則隊や加藤嘉明隊、井伊直政隊、本多隊など数多くの東軍部隊が、西軍部隊で最強を誇る宇喜多隊に突撃したが、宇喜多隊の猛反撃により相次いで後退した。この中で龍軍団は連発銃の圧倒的な威力と、完成した戦闘方法により宇喜多隊を追い込んだ。これこそ龍之介が夢にまで見た、冬の雪雲が龍となって立山を駆け上がる登る姿であった。

龍軍団の攻撃により宇喜多隊が浮足立ったところを、東軍の各部隊が宇喜多隊に突撃し、これを壊滅させた。石田三成隊には黒田長政隊、細川忠興隊が攻めていたが、士気が高い部隊同士の戦いであり、戦いは熾烈を極めた。石田隊は大筒などを用いて、必死に東軍部隊を抑えていたが、宇喜多隊を壊滅させた『高岡の龍軍団』が攻撃に加わり、また、小早川秀秋や脇坂安治らの裏切りによって西軍は総崩れとなり、三成は戦場から逃走して伊吹山に逃れた。

その後、三成は伊吹山の東にある相川山を越えて春日村に逃れたが、家康の命令を受けて三成を捜索していた田中吉政の追捕隊に捕縛された。また、東軍の攻撃を受けて三成の居城、佐和山城は落城し、三成の父・正継をはじめとする石田一族の多くは討死した。

天下分け目の戦いが終わり、津山龍之介は、家康から直々にねぎらいの言葉を受けた。「龍之介殿、この度の戦では一番厳しい場面で最高の戦果をあげてくれた。『高岡の龍軍団』の働きは抜群のものであった。改めて御礼を申し上げます」「そこの若者は龍之介殿のご子息じゃな」「わが長子、晋之介でございます。初陣でしたが、無事大役を果たしてくれました」「それは親子ともども、立派なことであった。龍之介殿、望みのものを何なりと述べられよ」

龍之介は心を決めて家康に答えた。「家康様、この度は名誉ある戦をさせていただき感謝に堪えません。私は15歳で高岡を出て以来、故郷に母を残して、今に至っております。願わくば、高岡に所領を頂き、龍軍団で共に戦ってきた者たちと新しい国造りをしたいと思っ

ております」

「高岡か。なかなか難しい望みじゃな。高岡、越中は関白殿が佐々成政から召し上げて、前田利家殿に与えた領地でもあり、それを龍之介殿の所領にするにはかなりの工夫が必要じゃな。それはそれとして、龍之介、晋之介親子に家康の康の字を与えるので名前に付けられよ。そして、徳川と協力して、越中をいい国にされるがよかろう」と上機嫌で家康は約束した。

龍之介は、「高岡の龍」軍団の結成以来取り組んできた戦闘能力が役に立ったことに満足を感じるとともに、これからの行く末を考え、感激を新たにした。

龍之介高岡城主となる

関が原の戦いから3年、小谷城で48歳を迎えた龍之介に、江戸開府を果たした征夷大將軍、徳川家康から安堵状が届いた。その安堵状には「津山龍之介に、越中国、新川郡、婦負郡、射水郡の49万石を安堵する」と書かれてあった。この安堵状には前田家の越中の所領を龍之介に与え、前田家には新たに越前を加増し、家康が大名の再配置に腐心した苦勞の跡が読み取れた。

高岡の城に入り、龍之介は思った。「わしは家康様に無理を聞いていただき、こうして高岡に錦を飾る事ができたが、この地を領有していた、前田殿の無念は計り知れないものがあるであろう。このことは深く心に留めておかなければならないぞ」

龍之介は高岡に入るとまず母親うめに長い間の不在を詫びた。「お前が高岡を離れて以来、私はお前の無事を毎日、立山様にお祈りをしていましたよ。こんなに立派になってお父様もさぞ喜んでおられることでしょう。今こそ、お父さまから預かった高貴の印をお渡ししましょう。いつかこの日が来るのを待っていましたよ」と、うめは喜び一杯で印を龍之介に渡した。高岡藩主となった津山龍之介は、將軍徳川家康から頂いた康を含む立山龍之介浩康に改名し、息子は立山晋之介高康と改名した。

龍之介は越中の将来を決める夢を、次々と実行に移した。その目指すところは、父から伝えられた高貴の印をもとにした、徳を大切にする豊かな国造りであった。

高岡城の痛んでいた石組みを、小谷廢城を修復してくれた穴太衆に依頼して改修し、高岡城を藩政の中心とした。少年の頃、心ならずも侍の子供を殺めてしまい、高岡を追放されたが、今は高岡の城主になっている自分を振り返ると、不思議な感じがした。

次に高岡城下に曹洞宗の高龍山立山寺を建立し、永平寺から和道和尚を迎えて開基とした。立山寺に父、津山多門の墓を築き、この寺を立山家の菩提寺とした。「父は、私の身代わりになって打ち首になられた。今、私がこうして高岡の城主として、国造りを出来るのは、父のタモ、津山多門のお陰だ。立山寺を菩提寺として、父や母の恩に報い、領民にも、豊かな生活をさせてやりたい」

龍之介は立山寺の住職、和道和尚に永年の疑問を聞いてみた。「京の町で初めてお会いしたとき、和尚は、私に吉相が見えると言われましたね」「龍之介殿、あれは不思議なご縁でした。私は永平寺での一通りの修行を終えて、全国を行脚しているときに当時、チャムと名乗っておられたあなたに出会いました。あなたの姿に光るものが見えました。不思議なことで

す」

「また、私が、秀吉殿の陣営から追放された時にも、和尚にお会いしましたね」「あの時は、家康殿からの依頼で、あなたにお会いしたのです。家康殿は、秀吉殿の亡き後は、龍之介殿や有力武将と力を合わせて、石田三成陣営に対抗し日本を統一するというお考えでした」

「なるほど。では、和尚が、『北国街道に旗を立てられよ。』と言われた意味は何だったのでしょうか？」「龍之介殿もご存じのように北国街道は、京や尾張と若狭、能登、加賀、越前等の北国を結ぶ重要な街道です。北国には上杉、浅井、朝倉、柴田、佐々、前田等の強豪武将が輩出しています。この北国の強豪を抑えるために、秀吉殿は湖北に長浜城を築かれました。家康様は、この秀吉殿の動きを牽制することを、龍之介殿に期待されたのです」

「和尚は、関が原の戦の前にも私のところにこられましたね」「関が原の戦では、全国の武将が、西軍、東軍のどちらに着くか、悩んでいました。そのため、徳川殿も本当はどれくらいの勢力が自分の側についてくれるか、読みきれなかったのです。その中で龍之介殿は、独立の軍団ながら、徳川殿の信頼が厚く、最も重要な正面を任せるに足る武将だったのです」「なるほど。私も秀吉様に追放されたときに石田三成の影を感じていたし、三成の側につくことなど毛頭も考えませんでした。徳川様にいい働き場所をいただき、今、このように越中49万石を所領させていただき、良い人にめぐり合ったと感謝しています」

龍之介は高岡を小京都と呼ばれるような街にすることを目指して、立山寺の前に門前町を作り、町民が安心して生活を出来るようにした。この門前町は龍之介がチャムと名乗っていた時代に見た、京の東寺の前の弘法市の賑わいを思い出して作ったものであり、妻チヌの父奎助が営む常設の日の出座も門前町に移設した。

また、門前町には堺から亡き千利休の高弟の千宗風を招いて、茶道のもつ高い文化を持ち込んだ。「宗風殿、私は北野の大茶会に参加する時に、利休様に、おだやかな心を持って大事にあたる心構えを教えてくださいました。また、大茶会の場で徳川様からお声をかけていただいたことが、わが人生の大きな転機になりました。茶の道では、俗な考えを持たず自然な心を持つことも大切だが、人と人がつながりを持つことも大切だと感じています」と、龍之介は宗風にしみじみ言った。

更に、龍之介は雑賀太市を処長として、海岸近くに『雑賀造兵処』を開設した。ここでは、元込め銃、連発銃の更に先を行く兵器の開発をするとともに、立山藩の若者に兵器の教育、訓練をすることを目指した。また、新たに鉄砲町を作り、堺で太市と一緒に連発銃を作っていた雑賀衆の人たちを住ませた。

太市は龍之介に言った。「関ヶ原の戦では、『高岡の龍軍団』に対峙した宇喜多秀家の部隊でも大砲を使っていたが、まだまだ兵器としての威力は小さかった。今、私がやろうとしていることは、まず、砲弾を丸弾からどんぐりのような長弾にして到達距離を伸ばすことです。次に、大砲の砲身の中に螺旋を切って弾を回転させて弾が安定して飛ぶことにより命中能力が高まるようにすることを目指しています。また、弾の中に火薬を入れて威力を増すようにしたい。ここ雑賀造兵処で、堺から高岡に移住してきた雑賀衆と一緒に新しい大砲作りを進めるつもりです」

また、龍之介は堺から碧眼の婿殿、安東次郎と妻ゆき乃を呼び、富山城の城主とした。次郎は、まず富山港を整備し、堺で交易に使用してきた帆船を富山港に回航して、新天地で日本海の北廻船貿易に乗り出した。

安東次郎は、越中でとれる米を西廻り航路で大坂へ送った。海路による輸送は陸路で大坂へ送るより、はるかに安く大坂に届けることができたため、莫大な利益を上げることが見込まれた。また、蝦夷の海産物を買付けて高岡へ持ち帰り、次に日本海沿いの町で商売をしながら南下して大坂で売り捌くことを始め、立山藩の財政を支えた。

ある日、龍之介は立山寺に和道和尚を訪ねて、ある考えを述べた。「和尚殿、私は高岡に藩校を作って、若い領民にしっかり学問を身に着けさせたい。藩校の名は、『高岡の龍軍団』と同じく、立山に雪雲が駆け登る龍を国の姿として、『龍国学舎』がいいと思っています」「龍之介殿、いい考えですな。若者を教育することはこれからの国造りの基本になるでしょう」

「和尚殿、どなたか、いい先生はおられるでしょうか。また、立山藩の国造りの学問は、論語や四書五経ばかりでなく、実学も身に付けさせるべきと考えますが」「龍国学舎の舎監については、永平寺の後輩で明道という雲水がいます。高潔で博識、また、全国を行脚して多くの知己を持っています。明道雲水ならば、きっと良い教育をされるでしょう」「是非、明道雲水をお連れください」「龍国学舎での教育は、漢学だけでなく、交易や鉱山等に関する幅広い実学についても、身につけることができるようにしましょう」「和尚殿、藩の若者が龍国学舎で学び、藩の将来を背負ってくれる日が楽しみですな」

逆に、和道和尚から龍之介に提案があった。「私は生薬に関心があり、全国を行脚しながら薬草を採取してきました。生薬についての関心を取り持つ中で、徳川家康殿とも交友してきました。また、京で有名な薬師である杉戸良元殿とも交友を続けています。ここ越中でも是非生薬を盛んにしたい。については、『薬師院』を富山城下を作って、生薬に携わる薬師を育て、また、生薬生産により藩の財政を豊かにしたいと思っています」

龍之介は、「和尚殿、『薬師院』を作りましょう。『薬師院』の院長は、今、和尚が言われた

杉戸良元殿がふさわしいかと思いますが、是非招請をお願いします」と、賛意を伝えた。和道和尚は、「龍之介殿、『薬師院』は私の夢でもあるので、杉戸殿にお願いしてみましよう」と、約束した。

龍之介が故郷高岡に藩主として帰ってから3年後の慶長10年、龍之介の母うめが死去した。享年、68歳であった。うめは生前、龍之介が故郷に錦を飾れたのは、「立山様がお守りしてくれたのだ」と常に繰り返していた。うめは菩提寺である立山寺で、和道和尚を導師として手厚い葬儀を営まれて、津山多門と同じ墓に埋葬された。

慶長13年、龍之介が江戸城に登城して、将軍徳川家康に藩の現状を報告した。この時、家康から言葉をかけられた。「立山殿、関ヶ原の戦のときに初陣で戦功をあげた貴殿の息子は何という名前であったかのう。それから嫁はもう、とられたかのう？」「息子は殿から康の名をいただきまして晋之介高康と申します。今年25歳になりますが、いまだ良縁には恵まれておりません」「おお、そうであったか。他でもないが、わが娘、綾姫が15歳になったが、晋之介殿と夫婦になってはどうだろうか？」「勿体なすぎる話でございます」

「いやいや、龍之介殿と晋之介殿の親子は、関ヶ原の戦で東軍勝利の流れを作ってくれた恩人だ。晋之介殿は綾姫の結婚相手としてふさわしい人物だと思っている」「ありがたいお話でございます」「実は、綾姫はわしが50歳の時の子で、また、その下の松姫が幼いうちに亡くなってしまったので、とにかく可愛いのじゃ。大事にしてやってくれ」

秋10月、真っ赤に燃えた紅葉の中を、綾姫が高岡の立山藩に嫁入りをし、領民は提灯行列で迎えた。立山藩と徳川家の絆は一層強化され、綾姫も夫、晋之介や高岡の町を愛して幸せな生活を始めた。

この、晋之介と綾姫の婚姻は、家康が『高岡の龍軍団』や晋之介を気に入ったばかりでなく、当然、隣国加賀の前田百万石の抑えに、越中を固めようとして打った手であることは明白であった。家康は、加賀の前田家3代藩主 前田利常にも、徳川秀忠の次女である珠姫を結婚させるなど、前田が離反しないよう特に気を使っていた。

綾姫が高岡に来てから3カ月、冬の寒さに体の調子がなじんでいなかったのか、綾姫が原因不明の病気になってしまった。藩の医師の見立てがうまくできず、杉戸薬師もうまく処方出来なく困っていた時、和道和尚が呼ばれて秘蔵の生薬を処方し、綾姫は病気から回復した。

龍之介は和尚に教示を願って、その秘蔵の生薬のもとになる薬草を立山で採取し、薬師院で生薬にすることとした。また、安東次郎は薬師院で作った生薬を北前船貿易の貴重な商品

として売り、利益を上げた。

高岡の4月は満開の桜が美しく咲いていたのに、また綾姫が不調を訴えた。周囲の者は一様に、「やはり、高岡の土地が合わないのだろうか」と、心配したが、今度は医師が喜びながら見立てをした。「綾姫様、晋之介殿、龍之介殿、おめでとうございます。ご懐妊でございます」「ああ、これで徳川將軍様もお喜びになられるでしょう。いや、目出たい、目出たい」龍之介はほっと一息をついた。

龍之介は早速、高岡から江戸城まで、將軍家康への報告に出向いた。「殿、綾姫様をご懐妊されました」「そうか、それで綾は元気におおるか？」「姫様はお元気でお過ごしです。近々、お子様が誕生されます。私の孫でもございます。まことに光栄なことでございます」「綾がいい子を生んでくれると嬉しいがなあ。ま、体を大事にするよう言っておいてくれ」「かしこまりました」

龍之介が綾姫の懐妊報告を終えて帰ろうとした時、家康は龍之介に言った。「立山殿、これからの戦いを制する兵器は大砲じゃ。立山藩には連発銃を作った雑賀太市殿がおられる。ぜひ、強力な大砲を開発し、天下安泰に役立ててもらいたいものじゃ」龍之介は「太市殿の大砲開発は、かなり完成に近づいています。太市殿にもうひと踏ん張りしてもらいましょう」と応えた。

高岡がまた美しい紅葉で輝いている時に、晋之介の長男が生まれ、龍之介は淳之介と名付けた。龍之介は、急いで江戸城に報告に参上した。「家康様、綾姫様に若が誕生しました。私の孫でございますので、淳之介と名付けさせていただきました。元気に育っております」「それは目出たい。ところで、そちが淳之介と名付けてしまったのでは、わしは、その下の名前を付けるしかないなあ。恒康と名付けよう。恒に康らかと願うて恒康じゃ、これはいい名前じゃ」「いい名前をありがとうございます。大切に育てます」龍之介は、晴れ晴れとした気持ちで、胸を張って高岡へ帰った。

それから4年、慶長18年4月、安東次郎とゆき乃の間に生まれた長女とき姫は15歳になり、その美しさは益々増していた。江戸城に登城した時、隣国、加賀の藩主前田利長と席をともにする機会を得た龍之介は利長に話かけた。「利長殿、私が高岡に入った時には、利長殿が佐々成政を征伐して領有しておられた越中を手放されることを強いるなど、大変なご迷惑をおかけしました。私は、故郷に戻りたい一心で徳川様にお願いをしましたが、前田様には、突然の話でさぞご立腹もされたこととございましょう」これに対し利長は、「立山殿、大御所様のお考えに逆らえないのは貴殿も十分お分りの事でしょう。立山殿は関ヶ原の戦で大変な戦功を挙げられたことだし、それに大御所様は、代わりとして越前の地をお与え下さった。大

御所様の苦心も理解しているつもりです」と、応えた。

龍之介は利長に一つの提案をした。「罪滅ぼしというのも言うのもおかしい話ですが、私の孫のときを前田様のご一族のどなたかに嫁とっていただければありがたいのですが」「とき姫と言えば富山の安東殿の姫で、たいそうな美人だとの評判を耳にしています。前田一族で誰か、さてと。越前の前田利行の息子、利邦はまだ嫁をもらっていないが。とき姫様はいくつになられたかの？」「15歳になりました」「利邦は確か22歳で、なかなかいい縁組になりそうじゃのう」「それはいい話でございます。ぜひ、よろしく願い申し上げます」

それから半年後の慶長18年10月、越前、敦賀城が紅葉で真っ赤に染められた中を、とき姫は前田利邦のもとに輿入れした。

大坂の陣

慶長18年の夏、雑賀太市が笑顔で高岡城に報告に来た。

「龍之介殿。かねてより開発中の大砲が完成しました。もう、発射試験も終わって実戦に使用できますぞ」「それは、おめでとうございます」「大砲は何発も発射すると、砲の中が熱くなって、砲の中で弾が爆発する恐れがあるのですが、その点も解決できました」「弾は遠くまで飛びますか？」「どんぐり形の長い弾で、砲身に螺旋を切りこんであるので、遠く飛ぶだけでなく、弾筋も安定し、よく命中しますぞ」「他所の大砲よりずっといいものができたようすなあ」「長浜の国友も開発しているようですが、こちらの方がずっといいものを開発できたと思いますぞ」

龍之介は太市の才能に驚きながら言った。「いい大砲ができて良かった。太市殿、その大砲を雑賀砲と名付けたらどうだろう？」「雑賀砲ですか、いい名前ですな。豊臣氏に滅ぼされた武器造りの一族、われらの雑賀衆の名前が残るのは大いなる名誉です。いい名前をつけていただき、ありがたいことです」

慶長19年10月、大坂城で豊臣秀頼を支える家臣の大野治長から龍之介に次のような内容の書状が届いた。

「立山殿、徳川家康は征夷大將軍について以来専横を極め、我らの主人である豊臣秀頼様をないがしろにしてきました。特に、方広寺の鐘の銘の一件では、豊臣家に難癖をつけ、豊臣家の取りつぶしを企図しています。徳川殿の行為は、目に余るものがあります。立山殿は「高岡の龍」軍団以来の、強力な連発銃部隊をお持ちであり、立山殿が豊臣軍に参加していただければ、きっと家康軍に勝つことが出来るでしょう。豊臣家には、秀吉様が残された莫大な財力があります。家康軍に勝った暁には、秀吉様の遺産を分与するとともに、百万石の所領をお約束します」

龍之介が驚いたのは、更にもう一通、淀殿からの書状があったことだった。

「立山様、あなたが秀吉様の大事な武将であった頃、私はあなたの活躍ぶりにいつも感心していました。また、鶴丸が生まれた時、亡くなった時、そして秀頼が生まれた時など、折に付けやさしい言葉をかけていただきました。不幸にして、秀次様の事件の折には、龍之介様も追放になりましたが、私は龍之介様が誠心誠意、秀吉様に尽くしておられたのをよく知っていましたので、秀吉様に嘆願して、切腹を回避して追放処分に留めることが出来ました。その後、いろいろありましたが、今、家康殿は秀頼様を亡きものにしようとしています。龍之介様、正しい道を進むのに手をお貸しください。よろしく願います」

龍之介は悩んだ。「淀の方様には、何の恨みもないどころか、私の知らないところで私の命

を救ってくれたのだ。命の恩人だったのだ。また一方、家康様には分不相応なほどの格別のご厚情をいただいている。単に敵を倒す戦いであれば思う存分力を出せるが、この恩を受けた人たちのどちらかを助け、どちらかを打ち倒さなければならないのだろうか。両者に和平の道は残されていないのだろうか」

龍之介のところに、徳川家康殿からも書状が届いた。

「立山殿。貴殿と私は、関ヶ原の戦以来、国造りを共にしてきました。私は、天下太平の世を実現するため、全身全霊を尽くしてき、今、江戸幕府の体制がほぼ完成しました。秀吉様が天下統一を目指されていた頃には、豊臣家が最高の地位にあったことは事実ですが、関ヶ原の戦を経て、世の中は変わり、新しい秩序が出来たのです。豊臣の残党に、この事実を分かってもらおうといろいろ試みたのですが、彼らはこのことを認めようとしません。残念ですが、天下国家の安泰のため、豊臣の残党を討たざるを得ません。秀吉公の下で幾多の戦功を挙げられた龍之介殿にとっても、心苦しいことかとは思いますが、ぜひ、力をお貸しください」

龍之介は、淀殿からの書状と家康殿の書状を見比べ、溜息をつきながら、決心した。

「豊臣の残党の側について奮戦しても、平和な国は到来しない。徳川様とともに国造りに励むことこそ、今の自分の進む道である。大恩ある淀の方様には申し訳ないが、新しい国造りのため、徳川様の下で働こう」

決心をした龍之介は淀殿に返書を送った。「淀の方様、お誘いの手紙誠にありがとうございました。そして、私が秀次様の事件で切腹にならなかった訳を知り、ますます大恩を感じております。しかしながら、時代は関ヶ原の戦を経て、更に徳川様が征夷大將軍になられるなど、徳川様を頂上とする新しい時代に入っております。龍之介は徳川様の下で平和な国造りをする時だと思っています。淀の方様、ぜひ徳川様との和平の道を探していただくよう伏してお願い申し上げます」

慶長19年11月、徳川家康が諸大名に大坂城攻撃を宣言し、大坂冬の陣が始まった。徳川家康は軍勢を率いて駿府を出発し、二条城に入り、同日秀忠が6万の軍勢を率い江戸を出発した。

立山藩は龍之介が総大将となり、晋之介が雑賀砲隊の隊長となって高岡から飛騨、高山、尾張を経て、京都に進出した。龍之介は晋之介に対して、「この度の戦にあたっては、雑賀砲の力を最大限に発揮して用いて戦勝を獲得せよ」と、命じて、自らは後方を固めた。

豊臣方は徳川方の主力が到着する以前に、淀川の堤を切って大坂一帯を水没させ、大坂

城を浮城にしようとしたが、本多忠政・稲葉正成などにより阻止された。その後、激しい戦闘が行われ、豊臣軍は守備隊の砦が陥落した後、残りの砦を破棄して大坂城に撤収した。豊臣方が籠城した大坂城を、徳川方は約20万の軍で包囲し、攻城設備の構築を行って大坂城に接近していった。

この接近時に豊臣方の挑発に乗って始められた、真田丸、城南の攻防戦では、豊臣方が徳川軍を撃退、諸隊に大きな損害を与えた。家康から將軍を譲られた秀忠は、家康が講和を策している事を知り、家康に総攻撃を具申するが、家康は「敵を侮る事を戒め、戦わずに勝つ事を考えよ」とこれを退け、豊臣方に投降を促す矢文を送り、甲斐や佐渡の鋳夫を動員して南方から土塁、石垣を破壊するための坑道掘削を始めた。

そして徳川方全軍による一斉砲撃が始められた。北方の備前島だけで大筒100門と石火矢が本丸北側の奥御殿に、南方の天王寺口からは本丸南方の表御殿に打ち込まれ続けた。この砲撃には立山藩の雑賀砲の他に、長浜の国友製3貫目の大砲や、イギリスから購入したカルバリン砲4門、セーカー砲1門やオランダ製4.5貫目の大砲12門が参加した。

これに対し、豊臣方は戦国時代の大名・大友宗麟が天正7年にポルトガル人から入手した青銅後装砲の「仏狼機砲」を使用した。徳川方の大砲は射距離が長く、砲内爆発も無く優れていた。

立山藩の雑賀砲から発射された弾丸が大坂城の天守閣に命中し、豊臣方は戦意を喪失した。徳川方の京極忠高の陣において、家康側近の本多正純、阿茶局と、豊臣方の使者として派遣された淀殿の妹である常高院との間で交渉が行われ、和平が成立して、家康、秀忠は諸将の砲撃を停止させた。

徳川家が「豊臣秀頼の身の安全と本領の安堵、城中の武士や浪人を不問にすること」で和議が成立したが、徳川方は大坂城の外堀を埋めた後に、二の丸も埋め立て始めた。和議は、立身出世や仕官を望む豊臣方の浪人達にとっては失業を意味した。このため、大坂城内では、次第に再戦を望む声が高まって行き、埋め立てられた堀の復旧工事などを開始した。

これを知った家康は、豊臣方に対して、「城中の浪人をすべて追放するか、豊臣氏は大坂城を出て伊勢か大和へ移れ」との要求をつきつけた。ここに至って豊臣氏の怒りは爆発、ついに再戦が決せられた。

慶長20年4月、夏の陣が始まった。

家康が名古屋城に入った後、秀忠は江戸を出発し、遅れて二条城に到着した。家康と秀忠は本多正信、正純父子、土井利勝、藤堂高虎らと軍議を行った。

この時の徳川方の戦力は約15万5千。家康はこの軍勢を二手にわけ、「河内路及び大和路から大坂に向かうこと、この他、紀伊の浅野長晟に南から大坂に向かうこと。また、道路の整備、山崎などの要所の警備を行うこと」と命じた。

家康が京を発した時、豊臣方では、交渉にあっていた大野治長が城内で襲撃される事件が起きた。交渉は決裂し、再びの開戦は避けられないと悟った豊臣方は、金銀を浪人衆に配り、武具の用意に着手した。和議により一部の浪人を解雇したことにより、豊臣の戦力は7万8千に減少し、さらに丸裸の大坂城では籠城戦は不利と判断し、豊臣方は積極的に討って出る作戦を採用した。

榎井の戦いに続く合戦を経て、最後の決戦のため豊臣方は大坂城で迎撃態勢を構築した。徳川方は、大和路勢および浅野長晟軍を茶臼山方面に、その前方に松平忠直軍を展開した。天王寺口は本多忠朝らが展開し、その後方に徳川家康が本陣を置いた。岡山口は前田利常らが展開し、その後方に近臣を従えた徳川秀忠が本陣を置いた。

立山藩は晋之介の率いる雑賀砲部隊が天王寺口に展開した。

5月7日、正午頃に開始された天王寺、岡山合戦は、これまでに例を見ない兵力と火力が集中し、大激戦となった。中でも立山藩の雑賀砲は砲弾の到達距離、正確さ、激烈さが抜群で、天守閣へ直撃により豊臣方は全く無力となった。

豊臣方の真田信繁、毛利勝永、大野治房などの突撃により徳川方の大名や侍大将に死傷者が出たり、家康、秀忠本陣は大混乱に陥るなどしたが、兵力に勝る幕府軍は態勢を立て直し、豊臣軍は多くの将兵を失って壊滅した。

本丸以外の堀を埋められ、裸同然となっていた大坂城は、もはや殺到する徳川方を防ぐ術がなかった。徳川方が城内に続々と入り込み、遂には大坂城本丸内部で内通者によって放たれた火の手が天守にも上がり、大坂城は陥落した。

そして、慶長20年5月8日、徳川秀忠の娘で豊臣秀頼の妻である千姫が、秀頼に助命嘆願をするよう説得したが、秀頼はこれを無視して、淀殿らとともに靱蔵の中で毛利勝永に介錯され自害した。

夏の陣が終わり、蟬時雨が降りしきるある日、龍之介と晋之介親子は、徳川家康に呼び出され二条城に参上した。

家康は、「この度の戦でも立山藩はよう働いてくれた。特に、立山藩の大砲の威力は大したものじゃった。高康殿が大砲部隊の指揮をとったと聞いたが？」龍之介が答えた。「お褒めの言葉、ありがとうございます。あの大砲は、わが藩では雑賀砲と呼んでおります。この度の戦では晋之介高康に雑賀砲隊の隊長を命じ、隊はよく働いてくれました」「夏の陣では、一時は真田などに攻め入れられ、とんだところで、命を落としかねないところもあったが、あの大砲のおかげで無事勝つことができた。改めて礼を言うぞ」

家康は話を続けた。「ところで立山殿。関ヶ原の後で、貴殿の望みを満たすために、前田殿の所領を国替えし、越中を貴公に領有させたが、この度は、各大名の領地も固まってしまった故、貴殿に新たな領地を与えることはできない。そこのところを承知してもらいたいのだが」「関ヶ原の後、高岡に錦を飾りたい一心で、大御所様には無理な願いをしまい、皆さま方にご迷惑をおかけして、申し訳なく思っております」

家康は一言、一言噛みしめるように話した。「立山殿。そう恐縮する話ではないのだ。貴殿の働きは、越中を所領にするに値するものであった。今、わしが考えているのは、藩の大きさは領地の広さや、民の人数、米の取れ高ではなく、交易や鉱山開発、漁の開発なども含めて、国が富んでいるかどうかで計るべきではないかということなのだ」「越中は米どころではありますが、わが藩でも、米以外でも藩を富ます道を探しております」「そうか、それは良かった。実は、立山藩には朱印を与えて交易を盛んにし、藩を富ませて欲しいと考えていたのだ」「大御所様、ありがたいお考えでございます。ご朱印を与えていただければ、わが藩は益々の隆盛を果たせるものと喜んでお受けいたします」

これに続いて、家康はしみじみと言った。「ところで、立山殿は生前の秀吉殿や、淀殿に世話になったはずじゃが、大坂の陣が終わってみて、どうお思いかな？」

龍之介は答えた。「正直申し上げまして、関白秀吉様や、淀の方様には大変お世話になりました。その大恩ある淀の方様がおられた大坂城の天守閣に、止めの砲を打ち込んでしまっ、まことに申し訳なく思っている次第でございます」「おお、そうか。わしも淀殿を死なせてしまって寂しさを感じているところだ。貴殿も承知のことだろうが、豊臣秀頼殿の妻は、わしの孫の千姫じゃ。大坂城の落城に際して、千姫はかろうじて城から救い出すことができたが、秀頼殿、淀殿は城と共に自害された。わしとしては何としても生きてほしかったのだが、淀殿は戦国の世を道連れにして行ってしまわれたのかのう」龍之介も家康の心のうちに深く共感した。

立山藩の国造り

龍之介は高岡城に戻り、大坂冬の陣、夏の陣の後、ようやく平和な時代が到来したのを感じていた。

ある夏の一日、龍之介は龍国学舎に明道舎監を訪ねた。「明道先生、龍国学舎の教育は進んでいますか？」と、龍之介が問うた。明道舎監は、「殿の思い通り進んでいると思います。龍国学舎では実学を重視して教育を行っています。私はここで学ぶ藩の若者とともに、藩内の鉱物探しを行い、立山山中で金や銀を含む鉱脈を発見しました。佐渡の金山や、石見の銀山には遠く及ばないでしょうが、藩の財政を支えてくれることを楽しみにしています。また、同じく、立山山中で燃える石の鉱脈も発見しました。燃える石は冬の寒さの厳しいわが立山藩の領民の暮らしぶりを向上するのに役立つことでしょ」と報告をした。

明道舎監は龍之介に新しい提案をした。「殿。越中はおいしい米と水に恵まれています。また、越中は冬の寒さにも恵まれています。この恵みを用いて酒造りをしてはどうでしょうか？」「うまい米と水と寒さでいい酒ができるだろうか？」「それに、麴と酒造りの職人である杜氏が必要です。麴は大切なもので、どこの藩も門外不出にしています。しかし、私は攝津に知己がいて、麴や、杜氏の紹介を受けようと考えています。摂津地方は、藩の力より商人の力が強く、利益を中心にして行動しているので酒造りの商人から麴や杜氏の紹介を受けることは可能でしょう。また、立山藩で造った酒を安東様の北廻船で上方へ送って販売すれば藩の財政に役立つでしょう」

龍之介は、つぎに鉄砲町に雑賀太市を訪ねた。太市は73歳になり、さすがに歳を感じさせた。「太市殿。雑賀砲はすごい威力でしたなあ。雑賀砲のおかげで大坂の陣で戦功を挙げることができ、また、大坂の陣の戦勝により、大御所様からもお褒めの言葉をいただいたし、徳川様を中心とした平和な社会が到来しました。雑賀砲は立山藩の恩人ですなあ」「それは良かった。雑賀砲がお役に立てて光栄です」「ところで太市殿。大坂の陣が終わった今、平和な世の中になれば、兵器ではなく、平和な時代に役立つものが大事になると思うが？」

そのことについては、雑賀太市も同じことを考えていた。「私もそろそろ『雑賀造兵処』を弟子に譲るつもりです。幸い、雑賀峯市という後継者が育ってきました。また、『雑賀造兵処』という名前も時代に合わせて『雑賀開発処』に改めたいと考えています」「それで何を開発するつもりですか？」「龍国学舎の明道舎監が、領内で鉱物や燃える石を見つけてくれましたので、これを生活に活かすものを開発していきたいと思っています。もっともこの先、完成まではとても生きられそうにないので、雑賀峯市にやらせようと思っておりますが」

雑賀太市は更に続けた。「安東次郎殿が帆船を使って北廻船を行っています。この北廻

船は大きな利益を挙げて藩の財政に貢献していますが、帆船ゆえに都合のよい風が吹くまで風待ちをする必要があります。これは遠い夢ですが、私は、風待ちをしないで航行できる船を開発してみたいと思っております」「どんな仕組みで船を動かすのですか？」「今、考えているのは、まず、燃える石を使って湯を沸かし、その湯気を水車に導いて水車を回す。水車の回転を人形からくりのように歯車で櫓に伝えるという方法です」「何だか出来そうな気もしますな」

太市は更に続けた。「この船を動かす仕組みが出来たら、交易船の他にも、漁師の船にも使えます。日本海に乗り出して漁をすればが、民の生活も潤うことになると思っております」「太市殿はまだまだお若いし、情熱にも溢れているので、ご自分で完成まで取り組まれたらいかがですか？」「いやいや、歳も歳ですし、もう口出しだけに止めておいて、あとは峯市にまかせますよ」

元和元年秋、龍之介は江戸城に登城し、徳川家康と話し合いを楽しんだ。「大御所様。ご機嫌麗しゅうございます。綾姫、淳之介恒康も、元気で過ごしております。それにわが息子の晋之介高康も、元気で過ごしております」「そうかそうか、それは良かった。綾姫は末っ子ゆえ今でも可愛くてしかたが無いんじゃ。淳之介恒康も元気でなによりじゃ」

「ところで、立山殿。大坂の陣も終って世の中が少しは平和になったようじゃのう。わしは若い頃から、『厭離穢土欣求浄土』の旗印を立てて戦ったものじゃ。今の世は浄土とまでは言わないが、どう思うかな？」「まことに、浄土が来たように感じられる今日この頃です」「立山殿には、関ヶ原の戦では連発銃隊、大坂の陣では雑賀砲隊で大きな戦功を挙げてもらったが、領地の加増はしてやれなかった。立山殿は、これからの時代に藩をどのようにして行かれようとお考えかの？」

龍之介は家康に立山藩が目指している国造りについて話をした。また、雑賀太市が兵器造りから平和な時代にあった開発に関心移して、今も情熱を持っていることなどを話した。家康は上機嫌で龍之介の話を聞くとともに、「前田殿とも国境のことなどで、いさかいを起こすことのないようにくれぐれも頼むぞ」と、話をした。

それから半年、元和2年4月、家康は鷹狩りに出た先で倒れ、駿府城で死去した。享年75歳であった。

元和2年5月一日、立山龍之介浩康は高岡城天守閣に立っていた。この日のために、妻のチヌ、息子の晋之介高康、その妻で家康の娘、綾姫、孫の淳之介恒康、碧眼の安東次郎、その妻で龍之介の娘ゆき乃、立山寺の和道和尚、雑賀開発処の雑賀太市、龍国学舎の明道

舎監、薬師院の杉戸良元、それに茶道の千宗風等が集まった。

龍之介は晴れ晴れとした気持ちで息子に伝えた。「高康、この度の大坂の陣ではお前の活躍もあって戦功を挙げて、大御所様からもお褒めの言葉をいただいた。その大御所様も今はおられない。私も、還暦を過ぎ、藩主の地位もいささか長くなりすぎた。今日から、この立山藩49万石を仕切ってまいれ。そして、藩の民がますます豊かに、安穩に暮らして行くように頼んだぞ」「父上、きっとこの立山藩の民が心一つにして、暮らしも心も豊かな藩にしています」

立山龍之介浩康は、息子高康に藩主の地位を譲り、大きな荷物を肩から下ろした。龍之介は、いつも自分を見守ってくれた立山の白く輝く峯を見た。また、目を移すと、高岡の町の向こうにきらきらと青く輝く日本海が見えた。それは少年の日に見た姿と少しも変わらないものであった。

完」